

「穂肥診断を必ず実施」し、適正に穂肥を施用しましょう！

1 穂肥時期のめやす(分施肥系)

・中生・晩生品種の出穂期は、「前年並み」の予想です

注)出穂期はほ場間で差があり、今後の天候等によっても前後します

品 種	出穂期のめやす	1回目穂肥		2回目穂肥		合計窒素量※ (kg/10a)
		時 期	出穂期前日数	時 期	出穂期前日数	
こがねもち	7/29 頃	7/11～7/14 頃	18～15	7/19 頃	10	1～3
コシヒカリ (平坦地) (中山間地)	8/1 頃	7/14～7/17 頃	18～15	7/22 頃	10	1～3
	8/8 頃	7/21～7/24 頃		7/29 頃		
にじのきらめき	8/6 頃	7/7～7/12 頃	30～25	7/23 頃	14	2～5
新之助	8/7 頃	7/17～7/20 頃	21～18	7/26～7/28 頃	12～10	0.5～3
みずほの輝き	8/10 頃	7/16 頃	25	7/27 頃	14	3

○稚苗5月10～15日頃、
中苗5月15～20日頃
の移植を想定
○穂肥時期は化成肥料
の使用を想定。

※合計窒素施用量を
2回に分けて施用す
る。

2 コシヒカリの生育診断

・1回目穂肥前に幼穂長や草丈、葉色を必ず確認し、穂肥時期・量を決定する。2回目穂肥は、後期栄養維持のため確実に施用する。

(1) 1回目穂肥の診断めやす(出穂24日前頃)

草丈	葉色(単葉)	
	SPAD値 35未満 葉色板 4.4未満	SPAD値 35以上 葉色板 4.4以上
75cm未満	時期・量とも基準どおり施用 →出穂18日前:1.0kg/10a	時期を遅らせて施用 →出穂15日前:1.0kg/10a
75cm以上～ 80cm未満	施用量を減らす →出穂18日前:0.5～0.8kg/10a	時期を遅らせ、施用量を減らす →出穂15日前:0.5～0.8kg/10a
80cm以上	施用できない	施用できない

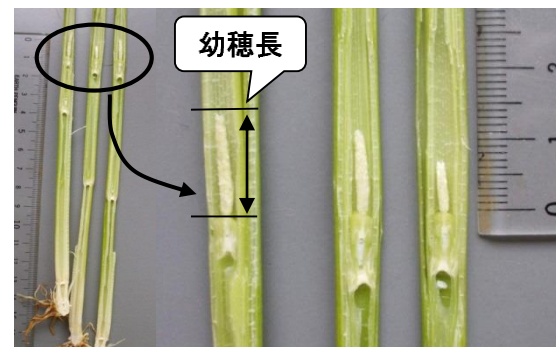
【幼穂長と出穂前日数のめやす】

幼穂長 (cm)	出穂前日数
0.02	30日
0.1	24日
0.2～0.4	20日
0.5～1.0	18日
4～6	12日
8～11	10日

生育診断時期

1回目穂肥時期

【幼穂長0.1cmの頃(幼穂形成期)に草丈・葉色を診断】



(2) 2回目穂肥の診断めやす(出穂12日前頃)

出穂14～12日前の葉色(単葉)	2回目の穂肥量(10a当たり)
SPAD値 35未満 (葉色板 4.6未満)	基準量どおり施用 (1.0～1.5kg)
SPAD値 35以上 (葉色板 4.6以上)	施用量を減らす (0.7～1.0kg未満)

・多日照・高温が予想され、葉色が急激に低下する
可能性があります。
・葉色が濃く、1回目の穂肥をしなかった場合も、
登熟期間の後期栄養確保のため、2回目の穂肥は
確実に施用しましょう。

(3) 出穂期10日前以降の穂肥(3回目)の対応

・登熟期間が高温と予想され、葉色が薄い場合は、以下を参考に3回目穂肥を施用する。

施肥体系(基肥+穂肥)	判断時期	葉色のめやす	施用する肥料	施用時期	施用窒素量(kg/10a)
慣行栽培(化学肥料体系)	出穂期3日前の葉色 ※単葉の測定値	SPAD値 31以下 葉色板 4.0以下※	化学肥料	出穂期3日前	1.0kg/10aを上限
特別栽培(減化学肥料体系)	出穂期6日前の葉色 ※単葉の測定値	SPAD値 33以下 葉色板 4.5以下※	有機50%肥料	出穂期3日前	1.0kg/10a(特栽米の上限に注意)
			有機100%肥料	出穂期6～3日前	1.0kg/10a

(4) 全量基肥施肥(一発肥料)の対応

・全量基肥肥料体系の場合、分施肥系の穂肥施用時期に飽水管理を徹底し、土壌中の水分を保持する。
・出穂後に高温が予想される場合、葉色の推移に注意し、出穂期の葉色(SPAD値)が32～33を下回ると予想される場合には、出穂期10日前までに窒素成分で1.0kg/10a追肥を行う(特栽米の場合は、化学肥料の上限に注意)。

3 斑点米カメムシ類による斑点米発生防止

各地の予察調査では、斑点米カメムシ類の確認地点が多く、斑点米の被害が心配されますので、以下の対応をお願いします。

- ・斑点米カメムシ類の多くは出穂したイネ科雑草を好むので、種子が結実しない間隔で草刈りする。
- ・薬剤防除の場合、剤型(粉剤、液剤、粒剤等)により散布適期が異なるので、剤型に応じた適期に散布する。
- ・斑点米常発地で共同防除より出穂期が7日以上早い品種では、共同防除前の追加防除が有効である。

【主な斑点米カメムシ類】



アカヒゲホソミドリ アカスジカスミカメ
カスミカメ